



小説 天戸祐輝

挿絵 緑木邑

第一章	悪魔を狩る少女	006
第二章	水中の浄魔少女	023
第三章	屈辱の愛交	062
第四章	弄ばれる浄魔士	132
第五章	悦辱の浄魔士	191

登場人物紹介

Characters



いずみみや はづき

泉宮 葉月

聖なる糸が封じられた指輪“聖輪”を使い、悪魔と戦う少女。戦闘時は長い髪をツインテールにしているが、普段は眼鏡をかけて髪を三つ編みに結い、正体を隠している。

いずみみや

泉宮 あいり

二年前に悪魔に連れ去られた葉月の双子の妹。

さりがりやくと

霧禍 略斗

葉月とあいりの幼馴染み。普段は葉月と共に悪魔と戦っている。

悪魔を倒し気が緩んでいた葉月に、再び重低音の声がかけられた。

驚きに見開かれる青い瞳。瞬時に攻撃態勢をとろうとした彼女だったが、その全身には意思を持った水が絡まり、再び水中へと引きずり込まれていく。

(倒した筈なのに……)

突然の攻撃に対処が間に合わない。肢体に絡み付いた水を斬り裂こうと聖輪を発動させて聖糸を動かしてみるが、斬っても斬っても次から次へと絡まる水が身体を離さず、水面へと戻る事ができない。

(くろう……このままじゃ、溺れてしまうわ……)

聖なる糸を動かしながら水中でもがき足掻く浄魔少女。だが意思を持った水が肢体を離す事はなく、瞳にキラキラと映る水面に近づく事ができない。彼女の唇からはゴボゴボと泡が水面へと昇っていき、肺の中の酸素が底を尽くこうとしていた。

(もう息が……)

酸欠に意識が遠のき、命を失う危険を感じた瞬間。少女の身体が急速に水面へと持ち上げられ、上半身が飛び出すように水中から浮かび上がった。

「ふはあつ！ ゴボゴホッ……はあつはあつはあつ……」

飲んでしまった水を吐き、荒い呼吸で酸素を取り込む。水着に包まれた形のいい双乳は上下に揺れ、あまりの苦しさには涙まで浮かんでいる。

「殺してしまつたら美味くなくなる……、ソの肢体、楽しませて貰ウゾ」

「くはっ……はあはあはあ……何を……ひうつ!？」

水魔の肉体となつたプールの温水がツインテール少女の肢体に絡み付き、生暖かい唾液のような感触となつて形のいい肉果実に触れてきた。露になつている両脚は足首から温水に絡み付かれてしまい、舌で舐められたようなおぞましい感触が内太腿を撫で、水着で覆われた貞操部へと向かつて柔肌を這い上がってくる。

肢体に絡み付く悪魔の嫌悪感に浄魔少女は貌を顰め、体液と間違ふような水魔の温度に背筋が寒くなつていく。鼻腔にはカルキと塩素、そして生臭い悪魔の体臭の入り混じつた水の匂いが入り込み、胃の中が掻き混ぜられたように吐き気が込み上げてきた。

「ぐうう……勝手に触らないでよ、気持ち悪い……」

貌を顰めながら身体に絡まる水を引き離そうと四肢を動かし、聖なる糸で水魔を斬り続ける浄魔士。だがどんなに暴れても水魔が肢体を離す事はなく、両胸が水圧で揉みしだかれ、太腿に絡み付いた生暖かい水が内腿を撫でながら両脚の付け根へと近づいてくる。

「これ以上私に汚い水で触れるな……」

「柔らかな肉ダ……、クク……すぐニ喘ギ乱れサセテヤル」

両胸に絡み付いた水が渦を巻き、柔房を優しく揉み絞るように刺激してきた。自分の手ではない他者の、しかも嫌悪すべき悪魔に柔房を觸られる初めての刺激に、葉月は屈辱感

と共に息が詰まるような圧迫を感じてしまった。

(なんで胸が……、魔物なんか……)

ナイロン布の内部で若い果実が一回り膨らみ、水着にお椀型の美乳がクッキリと陰影を落とし始めた。乳肌には身を振ってしまいたくなるようなくすぐったさが趨り回り、少しずつ呼吸が速くなっていく。両脚に絡み付いた生暖かい魔水は早くも太腿の付け根を撫で回し、背筋を撫で回されたような気持ち悪い肌痒さで若い肢体を虐げてきた。

「興奮してイルのか女？ お前ノ胸が手ニ吸イ付くよウに張ッテイルゾ」

「だっ、誰がお前なんかに興味なんてするものか、すぐに浄化して……はうっ!？」

新たな水がお尻に絡み付き、水着を通り抜けて尻肌を撫で回してきた。彼女の形のいい桃尻は生暖かい温水で揉まれるように觸られ、その割れ目にまで水流が流し込んでくる。

「やめ……この変態！ 変なところに水を……うう……」

生暖かい水魔の水が両尻を圧迫し、強弱を付けて揉みほぐしてきた。と同時に割れ目に流れ込んできた水が色素の沈着していない小さな窄みを捉え、尖らせた舌先で突つつくように觸ってくる。

少女の肢体は、排泄の孔を觸られる変態的な気持ち悪さに足掻いていた両脚の動きを止め、尿意に耐えるように両太腿を閉じ合わせ、水中でプルプルと震わせ始めた。

「随分ト敏感ナ身体ヲシてイルジャナイか、オ尻の穴がピクピクと痙攣シテイるゾ」

「この……黙れっ！ 人にも取り憑いてない悪魔のクセに……」

尻孔を觸られ、あまりの嫌悪と気持ち悪さに葉月の全身に鳥肌が立っていく。

桜唇からは吐き気を堪えるような呻きが洩れ、お尻の孔を觸られる羞恥に心臓の鼓動が速まってしまふ。水着の胸部には、水圧で揉まれ形を歪まされる肉果実が卑猥な状態で陰影を落とす、膨らみの頂が僅かにナイロンの布を押し上げ始めている。

「感じているノか女、乳首ガ尖リ始メテいるゾ」

「んあ……触れるな……ケダモノ……かふうううっ!？」

両胸を觸る水が柔房全体を包み、水着の中で僅かに尖った頂に触手のように巻き付いてきた。水魔は柔房を揉みながら薄ピンクの乳芽を水圧で押し潰して転がし、痛みを感じるほど強く摘んでは引つ張り、小さな頂を強制的に尖らせていく。

葉月の両胸には心地いい圧迫感と同時に、痛みを伴った乳芽の刺激まで加えられ、桜唇から堪えきれない悲鳴を洩らしてしまう。ジンジンと痺れるような刺激を感じる両胸は、肉房の内部に発情のシコリを埋められたかのように熱く疼き、鴉色とぎの頂が痛悦を伴いながら小指の先大にまで膨らみ尖っていく。小さく薄い色の乳輪は乳芽の刺激にプックリと膨れだし、頂と共に水着の胸部に現れてしまった。

「悪魔狩りとはイエ、ヤハリオ前は小娘ダ。肢体ヲ包マレ、胸ト尻ヲ觸ラれたダケデコンナにも乳首ヲ尖ラセ戦エなくナルとハ」

水魔が水着の肩紐を掴み、胸を露にさせようと少女の左肩から引き下ろしていく。

慌てて両腕を胸元で組んで防ぐが、左胸を包んでいたナイロン布が半分ほどが下げられてしまい、白い柔膨らみと乳輪の一部が室内プールの照明に照らし出されてしまった。

ナイロン布で体温を保っていた左胸には、温度調整されている筈の室内の空気が異常に冷たく感じられ、まるで水で肌を撫でられているかのように柔房の体温を奪われていく。魔の水は興奮を増したかのようにその質を変化させ、ゼリーのような感触となって透明感漂う白い肌に絡み付いてきた。

「この……調子に乗って……」

肢体を甦られる屈辱に目尻を吊り上げ、目の前で水の小山のようになった水魔を睨み付けた。その貌は羞恥に赤く染まり、身体を勝手に触られる悔しさに唇を噛み締めている。

「胸ヲ見ラれルノがソナナに嫌ナノか……、なラバ。モットイヤラシイ姿を見せて貰おうカ」

「何を……くう……」

葉月の肢体が持ち上げられ、仰向けの状態で固定させられてしまった。だが胸や両脚を甦る魔の水が身体から離れる事はなく、肢体の至る所に触手のようになって絡み付いている。

「お前なんて獣以下のウジ蟲だわ！ 私が必ず浄化してやるっ！」



「ソレは楽シミダ。ダガそのマエに、オ前の肢体ヲ味わわセテ貰うゾ」

水魔が僅かに貌を歪め、ツインテール少女の身体にのしかかっていた。大きな波に飲み込まれる寸前のように若い肢体の上で止まった水魔は、胸を押さえていた少女の左腕を自分の中に取り込むように水で包み込み、半分見えているCカップの肉果実にしゃぶり付いてくる。水着をふもとまでずり下げ、露になった左の柔房全てを生暖かいプール水と同じ温度の水魔の口に含まれた浄魔少女は、あまりの屈辱と嫌悪感に何も言う事ができず、自分の胸を食る悪魔を瞳に映す事しかできない。

水魔を斬り裂いていた聖なる糸は肢体を嬲られる羞恥と、肌に纏わり付く気持ち悪い水の感触に集中力を乱され、霊力を乗せきれず発動を停止させてしまっている。

(こっ、こんな悪魔の好きなようにされるなんて……、早く何とかしなきゃ、早く……)

透明な水魔に含まれた胸からチュパチュパと淫らな吸い音が奏でられ、左胸全体が吸われ円錐形に形を歪まされている状態まで見えてしまう。その度に肉果実は柔肌全体を細毛で撫でられているようなムズクすぐったさに襲われ、内部が頂から吸い出されて消失してしまうような感覚に陥ってしまう。限界まで尖った鴉色の頂は痛いほど疼き始め、今まで感じた事のない感覚に戸惑いながらも肉体が勝手に発情させられていく。

お尻を嬲っていた水は本格的に尻孔を嬲り始め、今にも腸内に入り込もうと小さな窄みの縁を撫でほぐしてきた。

「くはっ……はあはあはあ……やめなさいよ……この変態……はくっ！」

水に包まれた少女が突然ビクッと震え、腰を前へと動かして桜唇から艶めかしい声を洩らした。彼女のお尻をよく見れば、桃尻の割れ目を包んだ水着の一部がモコモコと蠢き、小さな尻孔を拡張させて水流を腸内に注ぎ込み始めている。

葉月は温水に腸内洗浄をされる異質なくすぐったさと、腸内で蠢く僅かな水に意識を失うほどの屈辱と拒絶を感じ、全身の肌が痙攣を始めるほどに鳥肌を立たせてしまった。だが同時に、体内をくすぐられるという異常な行為に背德的な焦燥感を感じ、頭の片隅が妙な期待感に包まれていく。

（くはっ……水がお尻の中で……なんでこんなにくすぐったいの……）

腸内で蠢く僅かな水の感触に戸惑い、肉体の内から湧き起こってくる異質な不安感に羞恥に染まった美貌を左右に振り、美しいツイントールの青髪を靡かせる少女。どんなに耐えようとしても乳芽とお尻を觸られる刺激に唇からは吐息交じりの声が洩れ、肢体中に肉悦に対する焦燥感が広がっていく。

「ククク……僅かな水デ尻中を觸ラレただケデ、ソナナに淫ラな声ヲあゲルとハ、本格的にマ○コを觸ッタラどんナ声デ鳴クのカ楽シミだ」

「くうっ……はあはあはあ……」

左の肉果実から口を離れた水魔が不気味な声で笑い、肢体を舐めるように下半身へと移

動し始めた。陵辱口から解放された美乳には再び触手のような水が絡まり、乳房全体を揉み溶かすように嬲りながら、ミルクを搾り出すように二つの頂を扱き立ててくる。

浄魔少女は両胸に感じる心地いい圧迫感と、否定する事のできない乳芽の刺激に吐息を洩らし、腸内を水で嬲られる背徳感に貞操筋を浮き上がらせ、長い睫毛をフルフルと震わせてしまう。

「随分ト感じヤスイ肢体ダ、ココもコンナニ勃ッテイルゾ」

「やめ……そこは……そこは触るなああああああつ！」

下腹部に移動した水魔が水着の股間部に浮き出していた女芽を捉え、ナイロン布を通り抜けさせた水をペン先大になっていた小さな女芯に絡ませてきた。

「そ、そこダメ……あうっ！ 嫌っ、きやうううううううううううっ！」

水圧で扱かれた敏感な女の弱点からは強烈な痺れが生まれ、全身の肌を感電させるように痺れさせ桜唇から悲鳴まで洩らしてしまう。腰は淫核を嬲られる度にビクビクと震えを繰り返し、剥き出されていく肉芽に生暖かな水とナイロン布が触れるだけで、下半身に力が入らなくなっていく。胎内では子宮が熱くなり、勝手に蠕動を始めた膣が滲み出した愛液を秘孔へと伝わっていく。

(このっ、いつまでも調子に乗って……)

葉月は自分の肉体が嬲られる羞恥と肉悦に耐えながら聖輪に靈氣を送り、聖糸を発動さ

せようと意識を集中させる。しかし、肢体を嬲られながら意識を集中させる事はなかなかできず、簡単には聖輪を發動させる事ができない。

「もう何ヲシようトシテモ手遅レだ、オ前のマ○コを拝ませて貰ウ！」

淫核を嬲っていた水圧が急に収まり、ジンジンとした疼きしか感じられなくなった。

「何をしようト……」

少女が赤い貌で自分の下半身を瞳に映してみる。ここでは水の小山になった水魔がいやらしい貌でニヤけ、両脚に絡めた水で足を左右に開かせようとしていた。

慌てて太腿に力を入れる葉月だったが、人外の力に彼女の力が敵う筈はなく、艶めかしい太腿は貞操筋を震わせながら開脚させられ、淫裂と女芽が浮き出した水着のクロッチを悪魔の眼に披露してしまう。

「こっ、この変態っ！ お前のようなウジ蟲はゴキブリでも相手にしてなさいよ！」

「ナラば、オ前ガそのゴキブリにナッテ貰オウカ」

水魔が水着のクロッチに水を絡め、股布を引っ張りながら横にずらしていく。誰にも見せた事のない淫部を魔物に見られたくはない彼女は、必死に暴れて肢体に絡み付くゼリーのような感触の水を振り払おうとするが、水魔にずらされていくクロッチは簡単にふっくらとした女丘に引っかけられ、魔眼に穢れのない淫部を晒してしまった。

明るい照明の下で淡い青色の草むらと、肉芽を剥き出された淫核を晒してしまった淨魔

少女は、耐え難い羞恥と氷のように感じる室内の温度で小刻みに震え、肢体の全てで悪魔の眼を楽しませてしまう。だが、淫唇は彼女がまだ処女だった為に左右の女肉がピッタリと閉じ合わされ、一番隠したい処女孔だけは辛うじて悪魔の眼に映されずに済んでいる。

「きゃああああああつ！ みっ、見るなああああああ——っ！」

葉月は湯気が立ち昇るほど貌を真つ赤に染めあげ、淫部を隠そうと右手を股間部に移動させ、生暖かい水で濡れ光っている淫裂を掌全体で押さえ込んだ。

「あれダメ魴つタノに、まだ閉ジタまマトは、マるデ赤子のヨウなマ○コダ」

「うっ、うるさいっ！ お前みたいな奴に、私は犯されたりなどしないわ！」

羞恥に染まった赤い貌のまま瞳を蠱惑的に吊り下げ、強気な口調で水魔を睨み付ける。しかし、淫部を見られてしまった屈辱に聖輪を発動させようとしていた意識は拡散してしまい、羽を象った聖輪から聖なる糸が発現してはこない。

露にされてしまった左胸と未だ水着に包まれた右の肉果実は、水圧によって揉みしだかれる力をより強い物へと変えられ、今にもナイロン布から右房が零れてしまいそうなほど大きく揺れている。

（こんな悪魔に犯されてたまるもんか……、絶対に私が浄化してやるんだから！）

揺れ動いて激しい乳悦を与えてくる両胸を左腕で隠すように押さえ、淫部に置いた手の聖輪だけに意識を集中させ精神と霊力を高めていく。今の状態で両手の聖輪を同時に発動

させる事は、肢体中から感じる気持ち悪くもくすぐったい焦燥感で不可能である。彼女は相手を倒す為に、掻き乱される意識を片手の聖輪だけに集中させた。

「随分トイイ姿ジャナイか、少シ味見をさせて貰ウゾ」

水魔に身を包まれた状態で揺れる双乳を押さえ、開脚したまま水着をずらされた淫部を隠す今の彼女の姿は、水面で浮かび自慰をしているような姿だった。

蠱惑的な瞳を少し潤ませ、聖輪に靈氣を集中させる為に肉悦に耐えているその貌は妖しい色気を醸し、どんな男でも欲情させてしまうほど淫蕩な貌である。当然彼女を矚る水魔もその貌と淫らな姿に欲情を抑えられず、開脚した太腿の間に水小山のような貌を移動させ、不定形の口から水塊の舌を出して手で押さえ隠す淫裂に向かわせてきた。

「くあああつ!? ……くうう……」

青い瞳を閉じ、淫部から伝わってくるムズムズとした感覚に耐える。彼女の右手は淫部を押さえたままだが、水で形成された魔の舌は掌と股間部の隙間をすり抜け、強い水流となつて淫裂を舐めあげ、肉溝の底に向かって割れ目に入り込んでくる。水の中にも拘わらず、淫部には肌に貼り付いてくる生暖かい唾液の感触があり、青く短い草むらや四枚の淫唇にまで絡まり付いてくる。

(耐えなくちゃ……後少し……後少しで……)

不定形の水舌が淫裂に割り込み、丹念に左右の淫唇に水舌を這わせ、処女の淫部にネバ

付いた唾液を塗してくる。その度に葉月は桃尻の尻タブをピクピクと引き攣らせながら、気持ち悪くも甘痒い刺激に耐え、少しでも気を抜いたら拡散してしまいそうな意識を聖輪に集中させた。

水魔の舌が淫裂を下から上へと一舐めする度に、彼女の唇からは甘い痺れに耐える呻きが洩れて肢体のどこかが引き攣り、それに合わせるかのように聖輪が青白く光っていく。

「舐メテヤッタノにマダ開カンか。仕方ない、ナラば直接ワレのモノで舐り、淫唇ヲ搔き広げてクレる！」

愛撫してもなかなか広がろうとしない処女の淫唇に業を煮やし、水魔が彼女の股間真下に水を凝縮させた全長二十センチほどの棒を作りあげた。プールの水面から天井に向かつて反り勃ったそれは、先端がキノコ状を形成して大きく笠を開き、水幹ともいえる直径三センチほどの棒に幾つかの瘤まで付いている。

（ふざけないでよ！ そんなモノを挿れられてたまるもんか！）

ペニスを形成した水を見た葉月は、絶対に挿入させまいと淫部を押さえていた手に力を込めた。しかし、水舌と同じように掌と淫部の僅かな隙間から水は入り、淫裂を水流で黴ってくる。手の甲には水の切っ先が押し当てられ、ゴム塊のような感触で淫部を覆う手を退かそうとしてきた。

「ヒヒ……どんナに押しエてもムダだ、すぐにもその邪魔なテを退かして我のモノで舐って



くれる……」

「はくっ……この……」

菌を喰いしぼり、淫裂を水流で煽られる刺激に耐える。だが、このまま右手で淫部を庇っているだけでは埒があかない。いずれ水魔の力で右手が退かされ、水でできた淫根に陵辱されてしまうだけだ。

（こんな水に取り憑いた悪魔なんかに、犯されてたまるもんかっ！）

葉月は覚悟を決めたように淫部を押さえていた手を離し、プールサイドに向かつて手を伸ばして聖輪を発動させる。だがまだ靈力が足りないのだろう、聖なる糸が現れてはこない。

（そんなっ!?!）

愕然とする浄魔士。そんな葉月を見た水魔は不気味な笑みを浮かべ、再び淫部に手を戻させまいと彼女の右腕に水触手を絡め、片手の動きを封じてきた。

「サーブスがいいじゃないカ。我ノモノを見た途端、自分からマ○コを見せてくれルとハ」「くあんんんっ！ 違っ……んっ……嫌ああ……」

手が退かしてしまつた淫裂に水魔が水幹を割り込ませ、素股をするように上下に動かしってきた。淫根と化した水幹は同じプールの水だというのに、その部分だけが沸騰したお湯のように熱くなり、深い女裂の底にまで雄の熱を擦り込んでくる。水笠と水幹にできた瘤

は、水ペニスが上下する度に淫裂を割り広げて大小四枚の淫唇を掻き捲り、一番敏感な淫核までその切っ先で弾いてくる。

淨魔少女の肢体は淫部で水の雄器官が上下する度、淫部から全身に広がっていくムズ痒さで四肢が痙攣するように震え、脳が初めての悦刺激に熱く火照ってしまふ。固く閉じ合わさっていた淫部は咲きかけの蕾のように柔らかくなり、膣は胎内でゆっくりと蠕動を開始し、閉じたままの秘孔から僅かな女蜜が溢れ水魔と化したプールの水に溶け込んでいく。「才前ノ愛液ガ溢レ、我ノ身体に溶ケ込ンでキタぞ！」

「ひゃううっ！　いつ、言うな……うっ……うっ……」

溢れ始めた愛液に水魔が歡喜を叫び、更に激しく水淫根を上下に動かし始めた。激しい肉擦れに少女の淫部は半ば強引に淫唇を左右に広げられ、薄赤いサーモンピンクの秘粘膜と、女蜜を溢れさせ始めた秘孔を透けた水ペニス越しに悪魔の眼に披露してしまふ。

直接觸られ始めたツインテール少女の秘所は、熱湯のような熱さとゼリーのような弾力の淫根の感触と共に、氷のように感じる室内の空気にまで撫でられ、急速に体温を高められて肢体に女の快楽を刻み込まれていく。

尻孔から体内に入った僅かな水は、彼女の腸内を隅々まで洗淨するかのように狭い蛇腹筒の中で暴れ回り、お尻の中で動く異質な拡張感で頭の中を掻き乱してくる。

「ふうっ……やめ……汚いモノでこれ以上……」

陵辱少年が膣内の気持ちよさに笑みを浮かべた貌を青い瞳に映しながら、破瓜の血が染み込んだショーツに手をかけてきた。手が離れた事で脚を閉じ、卑猥な姿を少しでも隠そうとした浄魔少女だったが、未だ絡み付く触手が脚を閉じる事を許さず、V字開脚させられた状態から元に戻す事ができない。

「ククク……、胸は妹の方が揉み応えがあるが、マ○コの中は姉の方が数倍具合がいいぜ……。ぶちまけてやる、精液の匂いが取れなくなるまでお前の膣内にぶちまけて、肉悦の事しか考えられない雌にしてやるぜ！」

ブチッ！ ジュブッ……ジュニユ……ジュブッ……ジュブッ……

「はぐッ！ ひぐッ……いつ、イヤ……動かないで……あぐッ、壊れちゃう……アソコが壊れ……ひやうッ！ ひやひいいいいいいッ！」

略斗がつの字状態の浄魔少女の股間部からショーツを引き千切り、隠す布を失った秘孔で赤い体液の付着した肉幹を律動させ始めた。

本格的な陵辱を開始された少女の唇からは痛々しい呻きが呼吸と共に洩れ、秘孔で淫根をピストンされる淫らな挿入音と混ざり部屋中に木霊していく。肢体にはその度に秘孔に杭でも打たれたような痛みが響き渡り、浄魔士として鍛えられた強靱な精神が刈り取られ、今にも意識を失い暗い闇の中に落ちていきそうになってしまう。

目の前で自分の膣内に入出入りを繰り返す肉幹は、秘孔から引き抜かれる度に愛液と共に

赤い体液を掻き出してしぶかせ、下にある貌や双美乳を淫らに彩っていく。

「クク……、いい姿だぜ葉月。処女血混じりの愛液が飛び散って、胸までバーズンを失ったみたいに赤く染まってやがる」

純潔の証が混じった愛液で濡れた胸を見た陵辱者が、葉月を言葉で辱めながら、双美乳をふもとで拘束していたブラジャーに手をかけてきた。

「口も尻もマ○コも貫かれた雌には、もうこっちの下着も必要ないよなっ！」
ブチッ！

「うああああ……そんな事言わないで……あぐッ！ もう酷い事しないで……ッ！」

ショーツに続いてブラまでが彼の手で引き千切られ、浄魔少女に陵辱されている屈辱感と悲しみを刻み付けてきた。彼の言葉はナイフのように純真な心を切り刻み、葉月に立ち直れないほどの心の傷を負わせてくる。

青い瞳に映る陵辱少年は、更に彼女の心に傷を付けるように引き千切ったブラで双美乳と貌に付着した体液を拭い、赤く染まった布を持ち主に見せ付けながら投げ捨てた。

(酷いよ略斗……痛いのに……もう……もうやめて……もう……)

破瓜の痛みと心の痛みに耐えられなくなった少女の意識が薄れ、涙を流していた瞳が輝きを失い曇っていく。痛みをあげていた唇は徐々に「はあはあ」と苦しげな息を繰り返すだけとなり、頭の中が激痛に満たされ何も考えられなくなっていく。

(氣を失えば楽になる……、もういい……もう誰も信じられない……)

助け出そうとしていた妹に恥辱を与えられ、共に戦い心を寄せていた少年にまで裏切られ陵辱された葉月の心は、ドス黒い絶望感に満たされ暗い意識の闇に墮ちようとしていた。四肢を拘束され、秘孔と尻孔を同時に貫かれる今の彼女にはもうどうする事もできず。このまま意識を失い、氣絶している間に陵辱が終わっている事を願うだけだ。

「意識を失ったら面白くないだろう。お前にも快楽を感じさせて、肉悦に乱れ自分から尻を振る女に変えてやるぜ」

意識を失いかけた淨魔少女に陵辱少年は下卑た言葉をかけ、持っていた魔辱の法錫を折り曲げて彼女の腹部にかざしてきた。

(なにをしようとしているの……、もうなにをしたって私は意識を保っていられ……)

「んはあああッ！」

意識を失う直前だった。桜唇から艶めかしく濡れた声が洩れ、肉エラで襲を捲り拡張されてきた激痛が嘘のように感じなくなり、代わりに腔粒を潰し、陵辱槍全体で腔壁を拡張し擦られるムズ痒い悦流が肉体中を駆け巡り始めた。秘孔を捲り返され、子宮口を突きあげられる衝撃を受ける度に、精神が溶けてしまいそんな悦痒みが脊髄を駆け抜け、揺れる二つの肉果実が切なく疼き柔肌が痺れていく。

肉悦を知っている尻孔は、桃尻から全てを掻き出したくなるほど激しい肉痒みに襲われ、

自然と陵辱肉が千切れてしまうほど淫肉を締めあげてしまった。

「くぁんんんんっ！ どうして急に……あうッ！ 身体中が熱くって……アソコとお尻の痛みが……くはぁぁぁぁぁあッ！」

プシュッ！

秘孔に深く突き込まれた瞬間、愛液が飛び散り自分の肢体へと降りかかってきた。肉体には再び絶頂寸前の肉疼きが駆け巡り、達してはいけない快楽の頂点を無意識に否定し腰を引かせてしまう。だが今度はその動きが災いし、尻孔を深く突き刺してきた触手によって悦痒さを桃尻に趨らされ、腸突きと共に腰を前へと戻されてしまった。

少女の腰は肉悦を逃れようとする動きと、触手によるS状器官突きによって、まるで略斗の動きに合わせるかのようにお尻を前後に動かし、膣内の感じるポイントに龟头が擦れるよう膣壁を淫らに蠢かせてしまう。

「はふうううっ！ すごい……あんっ……うっ……うんっ……アソコがもう我慢できなくって……はふッ……お腹の中がもう……ひゃうううううッ！」

下腹部から広がってくる悦流に頭を振り、長いツインテールを淫らに揺らしながら喘ぎ乱れてしまう葉月。初めての膣陵辱の悦痒みに対処する術を持たない少女は肢体を揺さ振られ、頭の中は快楽の頂点に達する事しか考えられなくなっていく。

「ククク。痛みを和らげる為に子宮内に入り込んだ魔物を利用してやっただけで、もうこ

続ける膣内には、今にも幾枚もの膣襞が秘孔から掻き出されてしまいそうな痛悦感さえ感じる。肉悦に完全に慣れた尻孔は激しい抜きさしを始めた触手に、今にもツルツルとした蛇腹筒を突き破られてしまいそうだ。

胎内を陵辱される二孔の強烈な肉刺激に少女の理性は崩れかけ、淫部から生まれる蟲悦感に脳が白濁し、全身の肌が絶頂へと向け一気に騒ぎ出す。

「はふッ、はあはあはあ……くうッ……うん……すごい……略斗……あううううッ！アソコが痺れて……お尻が溶けてくみたいで……はふううッ！」

散々焦らされた絶頂に近づき、浄魔少女の瞳が淫らに潤み快楽の声を洩らし始めた。肢体はもう膣内と腸内を貫かれる強烈な悦痺れしか感じる事ができなくなり、子宮口への一突き毎に脳が白濁し理性を失わせていく。両手は勝手に動いて掌に龟头を擦り付けていた触手を握って先液でベトベトになり、目の前でV字に開かされた両太腿の内側では、クッキリと浮き出した貞操筋が痙攣し、陵辱少年にも絶頂が近い事を告げている。

「そんなに気持ちいいのかよ、この淫乱女！膣内も全ての襞が痙攣し始めて、奥へと向かって激しく動いていやがるぜっ！」

「くうあんッ……そんな事……はくッ、言わないれ……、でももう……もうッ！」

陵辱者らしい言葉責めにも被虐的な喜びを感じ、美しい肢体を震わせ始める葉月。陵辱され続ける肢体はまんぐり返しという姿勢にも拘わらず背を仰げ反らせ、全身の肌から一

脊に大粒の発情汗が滲み、白いブラウスや薄紫の制服へと染み込んでいく。秘孔からは女蜜が閨欠泉の如く噴き出し始め、捲れたスカートの色を濃く変え美しい全身へと降りかかってくる。

「射精する前にいい事を教えてやるぜ。悪魔の力、特に強力な魔力を手に入れるのは厄介だね、この魔辱の法錫で呼び出し契約するだけでは済まない。自分に好意を寄せる穢れなく靈力の強い女を生贄に使い、一度その胎内に悪魔を巣くわせ、その後生贄になった女を俺が犯し、その子宮内に精を注いでやつと力を手に入れられるんだっ！」

「んはッ……んうう……そんな……くはあううううッ！」

彼の口から出た言葉にショックを受け、それ以上何も言う事ができない。彼は葉月を騙していただけではない、自分に寄せる好意を確かな物にする為に今まで清廉潔白な少年を演じ続け、身を挺してまで彼女を護り続けていたのだ。

葉月は肉体だけではなく、純心までいいように弄ばれていた悲しみに絶望が心の隅々にまで広がり、肉体から全ての力が消失していくような脱力感さえ覚えた。

(好きだったのに……身体と力だけが目的だったなんて……)

悲しみに包まれた葉月の肉体が何度も揺す振られ、肢体の至る所から淫らな音が鳴り響いていく。瞳には自分の全てを弄んだ男の貌が映り、息を荒げながら自分の淫部に激しく腰を打ち付けていた。

「ククク……出してやるぞ葉月。お前の子宮内に直接精液を注いでその肉体を俺の物にし、絶大な力を手に入れてやる！」

略斗の腰の動きが速まり、少女の腰をバネにしながら凄まじい勢いで秘孔を貫いてきた。悲しみと肉悦に苛まれた葉月には、もう美しい青色のツインテールを振り乱しながら喘ぐ事しかできなくなり、肉体の全てが絶頂に向け痺痺れ以外の感覚を感じなくなっていく。悲しみに包まれた頭は唯一の救いを求めるように快樂の事しか考えられなくなり、凜々しくも愛らしかった蟲惑的な貌に、淫らな笑みさえ浮かべ唇の端から唾液を零した。

「くあうううううッ！ なにか来ちゃう……はひッ！ はッ、あッ、はあああッ！ ン
ああああああああああああああああああ……ッ！
プシヤッ！ プシユウウウウウウウウウウ……ッ！

一際高い嬌声と共に浄魔少女がおとがいを仰け反らせ、小さく震えていた尿道から激しい勢いで潮を噴き出した。制服を半裸にされた肉体は痙攣し始め、淫部から発生した快樂の電流に全ての感覚が麻痺させられていく。膣と腸は胎内を貫く陵辱器官を喰い千切るほど強く締めまり、幾枚もの膣襜が巨肉槍に絡み、奥へと向かって蠢き引きずり込んでいく。

「くおッ！ 凄え締め付けだ、いくぞ葉月！ くう……グウオオオオオオオオオオオオオオ
おオオオオオオオオオオオオオオ—— つつつつッ！
どびゆるッ！ びゆぶどぶッ……どぶびゆるびゆるるるるるッ！

「ンあ……ダメ略斗……膾内は……膾内に出したら……熱ッ!? くうううううううううう
うううううううううう——
んンッ! ッッ!!」

肢体を痙攣させ頭の中を真っ白に染め上げていた少女の唇が自然と動き、略斗の精液を膾内に注がれ、子宮内にいる悪魔の強大な力を与えてはいけないと言葉を発した。

だが獣のような遠吠えをあげ、力強く秘孔を貫き子宮口に龟头を詰め込んだ略斗のペニスは、激しい胴震えを繰り返しながら少女の聖域へ溶岩のような粘度と高熱を有した陵辱液を迸らせ、悪魔が巣くった子宮壁にビチャビチャと白い粘液を撒き散らしてくる。

彼の射精と合わせるように、肢体の内外を觸つていた触手たちもその幹に熱い粘液を駆け登らせ、醜い切っ先から汚らしい粘音を鳴らし美しい肢体に穢れ液を吐き出してきた。

葉月は肢体を内外同時に穢されていく悲しみと、心が満たされていくような雄液の灼熱感に絶頂硬直した身体を痙攣させ、青い瞳から途切れる事のない涙を零した。

「くうあ……あうッ……はうッ……まだ出てる……くひいいいい……ッ!」

陵辱者の射精が終わらない。子宮に吐き出され続ける精液が、未だ射精直後のような勢いで子宮内に飛び散り、胎内の全てを焼き満たしてくる。触手たちもその迸りを止める事はなく、次から次へと葉月の肉体を白く染め、陵辱液を何層にも塗り重ねてきた。

豪雨のような射精の的にされ、半裸に纏っていた制服の色を濃く変えられ、集中的に陵辱液を吐き出される双美乳や淫部は、ダマになった陵辱液が淫核や乳芽の可憐な色まで塗



り潰している。絶頂に大きな口を開けたまま瞳を閉じた貌は白くなるほど陵辱液を撒き散らされ、口腔には唇の端から溢れるほど白い粘液が注ぎ込まれてしまった。

(いつまで出し続けるの……もう私の中……イッパイで……)

大量の射精を浴び続ける少女は命の危機さえ感じ始めていた。胎内に吐き出された陵辱液の量が多すぎ、子宮内は満たされて膨れ、膣内は壁や壁の隅々にまで精液が入り込み今にもはち切れてしまいそうだ。腸内でも尻孔から溢れながら複雑に体内に収まった内臓を逆流し、胃の中にまで流れ込み胃壁を穢してくる。

女の反応で絶頂し続ける肉体は、落雷に打たれたような狂おしい悦痺れと浮遊感に満たされ、肉体の全てが溶けていくような錯覚さえ感じていた。

「ククク……、流れてくるぞ悪魔の力が……最高の魔力が！」

最後の射精を終えた略斗が歓喜の声で叫び、穢れてしまった肢体から離れていく。

「くあ……うう……はあはあはあ……んふうっ……ぶおえっ！」

未だ続く絶頂に肢体を痙攣させ、口腔に溜まった陵辱液を吐き出した葉月は、触手に吊られたまま薄く脛を開き、ぼんやりとした視界で少年の姿を瞳に映してみる。

喜びに歓喜する彼はその肌色を浅黒く変え、肉体の至る所に血で描かれたような文様を浮き立たせていた。少女の膣内を貫いていた淫根は、新たに股間部から一本生やして前後に並び、雄々しく切っ先を天に向けている。眼の色は人間ではありえない黄金色と化し、

その全身から禍々しく強力な魔氣を立ち昇らせていた。

「やっと手に入れたぞこの力を！ これでゴミのような人間を征服できる。世界の全てはこの俺の物だ！」

（与えてしまった……略斗に悪魔の力を……感じさせられて……利用されて……）

葉月には理解できていた。略斗は霧悪魔の力を自らの肉体に取り込み、その絶大な力を我が物にしたのだ。その証拠に今の彼女の子宮内には巣くっていた悪魔の気配はなく、重く息苦しい陵辱の液重感と、肉体の全てを灼き溶かしてしまいそうな灼熱感しかない。

儀式の陵辱が済み用済みとなった浄魔少女の肢体は、四肢に絡み付き拘束していた触手によって下ろされ、冷たい床に寝かされてしまった。

「グスッ……おえっ……こんなのが私の初めてだなんて……」

絶頂の余韻が終わり、身体の火照りも消えかけた葉月の心が悲しみに満たされていく。

悪魔に処女のまま陵辱されて子宮内に巣くわれ、愛する少年に裏切られて処女を散らされ、力を手に入れる為の道具にまでされてしまった。肢体は穢されて白濁まみれにされてしまい、口腔にはネバついた感触と漢方薬のような苦味が充満している。秘孔と尻孔は閉じる事も忘れて陵辱液の絡まった内壁を晒し、子宮内は壁に絡まり染み込んでくる雄液の感触しかない。穢れた浄魔少女は頬の白濁を洗い流すかのように涙を流し、三つの穴からコブコブと溢れ出した陵辱で、法陣の描かれた床を白く染め広げていた。

我慢しきれなくなった淨魔少女の淫らな言葉に、彼女のクラスメートは何も言わずに欲望の切っ先で小さな秘孔を突き刺し、一気にその肉槍で膣内を貫いてきた。先ほどの大柄な少年よりも長い淫根は、淫らに蠕動する膣壁を捲り返しながら一回り太い亀頭を奥へと向かわせ、あと少しで子宮口に届くところまで陵辱の槍先を詰め込んでくる。

葉月は自分から受け入れたペニスの烈火熱と、膣内を貫かれ幾枚もの鬘を擦り捲られた狂悦感に歓喜の悲鳴をあげ、全身の肌を鳥肌立たせながら淫らな笑みを零した。

「いつもメガネをかけ大人しくしていた泉宮が、こんなに可愛くてエロイ女だったとはな、マ○コもきつくて、俺のモノに鬘と壁を絡ませて放さないぜ！」

「ひゃんンッ、はふッ……ンああ……はくッ、はうッ、くうんんんン……」

ジュプッ、ジュプジュプジュプッ！

興奮した男子が淫少女と化した葉月の細腰を掴み、下着に包まれた桃尻に激しく腹部を叩きつけピストンを開始してきた。淫根が秘孔を捲り淫らな水音を鳴らす度に、彼女の桜唇からは膣悦に喘ぐ濡れた声が奏でられ、長いツインテルが淫らに揺れまくる。下を向いても形を崩さない双美乳は、秘孔を突かれる衝撃に合わせて淫らに揺れ、弾けてしまうほどに尖った鶉色の乳芽から発情の汗が飛び散っていく。

(ンはああアああアああアあッ！ お腹の中がイッパイになって、アソコが痺れッ！)

膣内を灼熱の男根に擦り灼かれるムズ痒い悦流に、彼女の全身は弱電流でも流されたよ

うな痺れが趨り回り、まるで炎の中で身を焦がしているように肢体中を熱くさせていた。まだペニスを受け入れていない尻孔や、颯られる手を放された双美乳からは切なさを伴った焦燥感が生まれ、肉房の中にジクジクと治りかけの傷のようなシコリを作っていく。潤んだ瞳は目の前で切っ先を天に向け、肉幹に血管を浮き上がらせた幾多のペニスを映し、卑しくも喉を鳴らしてしまった。

(欲しい……アレが……もつと……もつと熱いペニスで身体中を……)

膣内に熱い雄肉で拡張された為に、雄槍の熱を感じない全身が苦しいほど切なくなり、膣以外の部分から感じる物足りなさが胸を締め付けてきた。床に手を付いていた両手は自然な動きで目の前で欲情を漲らせるペニスを握り、掌を焼き尽くすような雄熱と凝縮したゴムの弾力を感じながら、その切っ先を濡れた声で喘ぐ桜唇へと運んでいく。

「んあッ、んふうう……熱い……これ……私にください……ちゃぷッ……んン……んッ……んふうッ……はふうむううううううッ！」

淫熱に精神を碎かれた葉月はおもむろに握った淫根を口腔に含み、その切っ先を喉奥にまで埋め込み、肉幹に可憐な舌を這わせながら貌を前後に動かし始めた。

口腔に雄の脈動と、熱く猛る淫熱を感じながらの奉仕に脳は灼かれ、喉奥にまで龟头を差し込み喉粘膜を擦られる息苦しい被虐感に喜びすら感じる。四つん這いの肢体は膣を貫かれる度に前後に動き、口淫をする度にユラユラと揺れるツイントールが、淫らに誘う手

のように周りに居る男子を誘惑した。

「こんなエロイ姿見せられたらもう我慢できねえ、マ○コにぶち込む前に綺麗なその貌に射精して、ドロドロに穢してやるっ！」

「俺も射精してやる！ もうどこだっていい、これ以上我慢したら泉宮の中に挿れる前にチンポが破裂しちまうぜ！」

口と秘孔で肉槍を受け入れ、くぐもった声で淫らに喘ぐ浄魔少女の姿に我慢しきれなくなった同級生たちが、次々と肢体中にペニスを押し付け、亀頭で柔らかな肌を磨りながら淫幹を自ら扱き始めた。葉月の肢体には一気に溶鉱炉のように熱い雄熱が幾つも感じ始め、肌を焼き肉体の奥にまでその猛りと脈動を刻み込んでくる。

(んあああ……すごい……皆こんなに興奮して、熱いのがいっぱい身体に伝わってくる) 肢体の芯まで焼き尽くしてしまいそうな雄熱の多さに、彼女の興奮が更に高まって肉体を激しく動かせ、秘孔をより強く締め付けて膣内を下から上へと激しく蠕動させ始めた。口腔に収めたペニスは可憐な舌で肉幹を刺激し、喉奥は填め込んだ亀頭を胃に落とそうと何度も嚥下するように動かせ、溢れてきた先液を喉粘膜に染み込ませていく。

「ぐおおッ！ 俺もう出る……ぐうううっ！」

「ぐうああッ！ チンポが泉宮に呑み込まれちまう、おうっ。うひゃあああああッ！」
びゅぶるっ！ びゅぶぶ……、どびゆるびゅぶぶどぶっ！



「んふあああ……まふあダメ……もふ少ひ我慢し……あふうんんんんんッ！」

ツインテール少女の願いも虚しく、口腔と秘孔を貫く二本の肉槍がその灼熱度を高めて激しく震え、ぷくつと膨らませた切っ先から灼熱の陵辱液を迸らせてきた。喉粘膜や腔内に直接吐き出された雄液は、彼女の胎内に煮え滾った炭酸でも注いだかのように腔襞や粘膜をくすぐり、快楽の極電流となって肉体を痺れさせ脳を突き抜けていく。肢体は硬直痙攣を繰り返してガクガクと震え、新たな精を注がれた秘孔からは、腔口と肉幹との隙間から間欠泉の如く白みがかった女蜜を噴き出してしまった。口腔は舌に白濁が纏わり付き、吐き気を催す苦味が口の中にいっぱいに広がっていく。

子宮内では巣くった悪魔が二体、葉月の肢体内で射精した二人の男子に肉体の中を移動して取り憑き、激しい射精を迸らせながら浄魔少女の身体から離れていった。

「はふうううううっ！ まだ足りないの……まだ身体が……」

「ククク……、本当にチンポの好きな淫乱女になっちまったな葉月っ！ こんな雌に惚れられ、汚いマ○コに俺のモノを挿れていたなんて反吐がでるぜっ！」

二人の男子を口と秘孔で射精させ、潤んだ瞳に周りを取り囲む男子のペニスを映すツインテール少女に、略斗が下卑た口調で声をかけてきた。

「くうはっ……んうっ……はあはあはあ……そっ、そんな事言わないで……私だってもう皆を悪魔にしたくないのに、もう身体が……身体が熱くって言う事を聞かなく……」

めたのになあ」

「俺は幻滅だぜ、大人しくて結構好きなタイプだったんだけどな。仕方ないからこれからは学園中の肉便器にでもなつて貰つて、俺を幻滅させた責任でも取つて貰おうぜ」

男子たちが好き勝手な事を言いながら、騎乗位で腰を上下させる姉妹の周りで淫根を突き出してくる。鉄の如く硬く勃起したそれらは全て切つ先からカウパー液を垂らし、鱧えたような匂いで鼻腔を貫いてきた。

「はあうッ！ くはッ……はあはあはあ……こんなに沢山のモノが私に……嬉しい……」
自分を取り囲む肉槍の林を見たツインテール少女は、左右に居た男子のペニスをそれぞれ握り、両手で扱きながら先割れに尖らせた舌を這わせ始めた。

皆に見られながら淫らな行為を行う背徳的な興奮に、肢体の感度はますます高まり、ペニスをピストンさせて膣壁を捲り擦らせる女の悦痺れが、ボルトを高めた悦楽の極電流となつて肢体中を感電させていく。秘孔からは女蜜の飛沫が止まらずに噴き出し、揺れる双美乳が今にも破裂してしまいそんなほど柔肌を張っている。

「くそっ、マ○コが空くのを待つてなんかいらねえ。俺はこつちを貫いてやるぜ！」

自分の番が待ちきれなくなった男子がツインテール少女の背後に回り込み、桃尻の白いハイレグショーツを引き千切らんばかりに横にずらし、谷間で息をするように開閉を繰り返していた小さな窄みに切つ先を押し付けてきた。

「うはあうううっ！ はうッ……いいの……オマ○コもお尻もよくつて……はくッ！
もつと犯して……皆のチンポでもつと私を突き刺してッ！」

肉交を感じる二孔を深く貫かれ、薄い壁を通して胎内で二本の淫根を擦らせた浄魔少女は、激しい悦流に脳を痺れさせたまま肢体を跳ねさせ、胎内に収まった陵辱槍をきつく締め付けた。淫らな舞いを踊る少女の姿に、彼女の手で淫根を扱かれていた二人の男子は激しく腰を前後に振り、龟头を桜唇に含まれる度に可憐な舌に切っ先を擦らせ先液を噴き出していく。

下半身の二孔を貫く男子たちも淫姉の激しい上下運動に、菌を食いしばりながら肢体の下と背後から形のいい肉果実を掴み、孔を捲り返し肉幹を激しくピストンさせる事しか考えられなくなっていた。

「あんんんッ！ お姉ちゃんあんなに激しくチンポをしゃぶって……わたしももつと……うん……お姉ちゃんより激しくチンポ突き刺してッ！ ひゃううううッ！」

姉の痴態に興奮したあいは、更なる陵辱を求めて大きなお尻を近くに居た男子に貫かせ、慣れた手つきで手淫を行い交互に龟头を唇に含む口淫を始めた。肢体は姉よりも腰を上下に動かして二孔を貫くペニスを出入りさせ、長い髪を激しく乱れさせながら濡れた嬌声をあげ続ける。大きく揺れる二つの峰乳は、それぞれ違う男子に龟头を押し付けられ、切っ先で薄ピンクの尖りを齧られながらお湯のような温度の先液を塗されていく。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>